

# 老舎「月牙兒」にみるキリスト教の愛と平等

福 島 俊 子

## 1. はじめに

老舎の中編小説「月牙兒」(三日月)は彼の小説創作の豊穡期とされる山東時代<sup>1)</sup>に書かれ、「駱駝祥子」「我這一輩子」とともに社会の底辺に生きる人物を描いた作者の代表作の一つである。この作品は、貧困ゆえに生きるために娼婦に身を落す一人の女性の半生が、主人公「私」の一人称で語られる。題名となった三日月は、人生の節目でそれを見上げる主人公に寄り添うようでもあり、また彼女のはかない身の上を象徴するかのようでもある。

従来この作品は旧社会の悪弊や貧困、女性の苦難をテーマとした作品として読まれてきた。先行研究では、社会の悪の暴露と社会批判<sup>2)</sup>、老舎の人道主義の投影<sup>3)</sup>、封建社会の男女不平等への批判<sup>4)</sup>、老舎の悲観的な人生論の発露<sup>5)</sup>等の指摘がなされている。これらに共通するのは主人公への同情と憐憫という視点であり、それは李蓉の「犠牲、苦難、抑圧され、侮辱され、損なわれる」という「下層妓女の主流言説モデルを肯定したテキストの典型」<sup>6)</sup>という指摘に総括されよう。

これに対して、主人公の妓女表象は従来の下層妓女言説の域に収まらないとする論がある。郭文元は、「男性中心文化に対する母娘の反抗」だとし<sup>7)</sup>、江上幸子は、「「私」は、典型的妓女作品に描かれる「被害者」とは異なる「極めて主体的な人物」だと論じている<sup>8)</sup>。

筆者は従来の主流の読み、すなわち「月牙兒」は娼婦になるよりほかに生きる術のなかった女性の苦しみや悲惨な境遇を描くことで、旧社会の暗部を批判した小説であるという解釈に異論はない。しかしそのうえで、主人公の妓女表

象に主流言説で描かれた下層妓女とは異なる部分を認め、そこに妓女への同情と憐憫を越えた、老舎のある思いが託されているように思えるのである。

「私」の特異性は、老舎の他作品に登場する伝統的妓女言説で描かれた娼婦たちとの対比によって明らかになる。彼女たちが娼婦に身を落とした後に自ら命を絶つものに対して、「月牙兒」の「私」はどれほどみじめで絶望的な境遇にあらうとも生きる望みを捨てきれない。老舎は最後まで「私」を死なせず、彼女の言葉で生きることへの思いを語らせることで、社会の底辺で誰にも顧みられることのない一つの命の価値を問うているかのようなのである。それはクリスチャンであった老舎が同情と憐憫という傍観者の視点を越え、キリスト教の愛と平等の思想に拠って娼婦の命を見つめたものと考えられないだろうか。本稿は、これまで社会批判の方向で読まれてきた「月牙兒」をキリスト教の愛と平等という視点から読み直し、老舎が託したもう一つの意味を考察するものである。

## 2. 老舎とキリスト教の愛と平等

「月牙兒」のテキストについて論じる前に、キリスト教思想の中心である愛とそこから生じる平等を老舎がどのように受け止めていたかを、彼の生い立ちとキリスト教入信までの経緯を踏まえて考えたい。

### 2.1 満州族としての生い立ち

老舎の幼少期から青年期にかけての人格形成には、貧困と差別という二つの事実が大きな影響を与えたと考えられる。老舎は清朝末期の1899年、満州族正紅旗の貧しい下級旗兵の家に生まれた。老舎誕生の翌年、父親が義和団事件により戦死すると一家の暮らしは逼迫した。母親は繕い物や洗濯などで稼ぐ僅かな賃金と少ない遺族扶助金（元の俸給の約半額）をやり繰りして一家6人の生活を支えた<sup>9)</sup>。

この貧困に加え、満州族としての社会的差別を受けたことが老舎の生い立ちに影を落とした。排満興漢を掲げた革命により清朝は滅びたが、中華民国成立の後もお排満の風潮は衰えなかった。自ら満州族である関紀新は、孫文等が封

建帝政打倒を掲げたとき、反封建の意識を持たぬ民衆を民主革命に向かわせるため、排満という種族革命の側面を強調して一致団結を図った結果、「驅逐韃虜、恢復中華；創立民国、平均地権」という綱領のうち、民主革命として重要な後ろの二項よりも前の二項がより人々に浸透し、清国崩壊と同時に満州族に対する全否定が完成したのだと論じている<sup>10)</sup>。

こうして清滅亡とともにそれまで国に仕えてきた満州族は失職、貧窮するのみならず、酷い差別にも晒されることになった。清朝崩壊後にそれまでのスキルを活かして職に就けた者は少数で、多くの者は社会底辺の職に就くか或いは職に就けないかであった。就職困難の主な理由は、仕事のスキルを持たなかったことと雇用において差別を受けたことである。この状況を漢民族側は、長年清からの俸給に甘んじまともに働かず、スキルも持たぬ旗人の身から出た錆だと認識し、旗人は怠け者というイメージが社会に浸透し、その生活習慣は嘲笑され、被征服者、落伍者と見做された<sup>11)</sup>。老舎は新中国建国後に、多くの旗人青年が教育や仕事のスキルといった労働に必要な条件を持ちえなかったことを次のように釈明するとともに、満州族への差別が理不尽なものであったという思いを吐露している。「もともと、清朝の皇帝は旗人に対し、ただ朝廷にだけ忠義を尽くすよう要求し、自ら生計を立てることを許さなかった。だから彼らが労働に長けていなかったのも無理はない。辛亥革命は幾分大雑把にすべての満州族を敵視したところがある<sup>12)</sup>。」

以上のことから、老舎の幼少期から青年期までは貧困と理不尽な差別の中にあり、それが彼に劣等感や屈辱感、いわれない差別への怒りを抱かせたと考えられる。そんな彼の心を癒したのはキリスト教との出会いであり、その愛と平等の教えであった。次にこれについて述べる。

## 2.2 キリスト教の愛と平等

老舎とキリスト教の直接的な出会いは、1921年に彼が北京缸瓦市基督教会の夜間の英語学校に通い始めたときであった。ここで直接的な出会いは、それ以前にも五四新文化運動期の作家たちの作品を通じ、彼らが反封建という形で

取り入れたキリスト教の思想に触れていたはずだからである<sup>13)</sup>。さて、この当時の老舎の状況を見ると、彼は京師郊外北区勸学所（今の教育局に相当）の勸学員という厚遇の職にあったが、そこで教育界の腐敗に直面し、その後1922年7月には辞職することになる。また私生活では母親が決めた縁談を断ることで母親と衝突し、元来親孝行な彼は苦悶した。これらのストレスに加え酒や麻雀による生活の乱れもあり、1921年の春には大病を患い約半年の療養を余儀なくされた。その後回復した老舎は、生活を改めて何か人の役に立つことをしようとするのだが、教会の英語学校に通い始めたのはまさにその頃であった。

キリスト教は、神は無償の愛で人を深く愛し、すべての人は神に愛されるかけがえのない存在であり、人の罪はイエス・キリストへの信仰によって神の赦しを得られると説く。そしてこの神に愛され赦されるということにおいて人は皆平等であるとしている。このキリスト教の愛と平等の思想は、それまで中国社会を支配していた儒教の価値観とは大きく異なるものであった。まず神による無償の愛という概念は儒教には存在しないものである。また儒教では道徳の根本に三綱があり、尊者に対する服従が求められるため、人は社会や家庭において上下の位置関係の中にあり、人皆平等はありえない。当時は五四新文化運動による儒教批判の潮流の中にあっただが、老舎自身も従来の儒教に基づく封建的価値観に抵抗を感じていたであろうことが、母の命による結婚を拒否したことから窺える。1920年当時、親の命による結婚は都市部においてもまだ80～90%を占めており<sup>14)</sup>、これを断ることは親の面子を潰す親不孝なことであった。だが老舎は自己意思に拠らない結婚を断固として拒否し、その結果自らの親不孝に苦しみ大病まで招いたのだった。心身ともに疲弊し、満州族としての鬱屈した思いをも抱えていた青年老舎にとって、教会で出会ったキリスト教の愛と平等の思想はその心を癒し、安らぎを与えるものであったことだろう。自分は神に愛される価値ある存在であり、また神の前では満州族も漢族もなく人は皆平等であると考えるとき、老舎の心は救われたのではなかろうか。さらにキリスト教では、イエス・キリストが人を愛したように人も互いに愛し合おう、隣人を自分のように愛すよう求めている<sup>15)</sup>。これは、「自分の望まないこ

とを人に仕向けないように<sup>16)</sup>」という論語の仁の教えより更に積極的なものと理解できる。この教えは、人の役に立つことをしたいと願った老舎の心に適うものであり、その実践として老舎は教会の奉仕活動などにも熱心に参加した。こうして老舎は儒教に代わる新しい価値観としてキリスト教を受け入れ、1922年には洗礼を受けたのであった。

以上、老舎の満州族としての生い立ちと入信までの経緯から、キリスト教の愛と平等の思想は老舎の心を癒すとともに彼の中に根を下ろし、その後の生き方の指針ともなったと言えよう。では老舎はこの愛と平等の思想に基づいて「月牙兒」の「私」をどのように描いたのであろうか。テキストに沿って考えてみたい。

### 3. 「月牙兒」にみる愛と平等

「月牙兒」は1935年4月に『国聞週報』第12巻第12-14期に掲載され、同年8月短編集『桜海集』に収録された。はじめに小説の梗概を紹介する。

物語は「私」が監獄の中で三日月を見上げ、幼少期からの出来事を回想するかたちで始まる。私は七歳の時に父を亡くし、母親と二人食べるにも事欠く日々を送る。その後母の再婚で生活は安定するが、数年後義父が突然失踪すると母娘は再び路頭に迷う。母は私娼となり生活を維持し、私の心の中で母に対する感謝と嫌悪が交錯する。小学校卒業間近、「私」は母から母の仕事を手伝うか自立するかを選択を迫られ、自立することを選ぶ。饅頭店主の情婦となる母と別れた私は、校長の好意で食と住（用務員室）を与えられ卒業後も学校に住むが、校長の交代でそれも失う。自活すべく職を探すも見つからず、半ば騙される形で校長の甥の愛人となり、わが身を嘆きながらも彼に対して恋に似た感情を抱く。しかしそれも長くは続かず、甥の妻に懇願され彼の元を去る。再び職探しに苦勞した末に食堂の接客係として雇われるが、店主から客に媚を売る接客を求められると拒否してすぐに辞め、遂に私娼となる。その過程で母への嫌悪感は理解と共感へと変わり、病気になり身も心も疲弊したときに母が現れる。母は娘を労わりはするが娼婦をやめろとは言わず、娘の稼ぎで母娘が糊

口を凌ぐ日々が続く。その頃私娼の取り締まりが厳しくなり、「私」は警察に捕まり感化院からさらに監獄へと送られ、絶望と諦念の中で三日月を見上げる。

### 3.1 現実世界の不平等

この小説に描かれているのは不平等で理不尽な現実世界である。その根幹にあるのは貧困と女性の社会的地位の低さであり、それが全編に亘って母娘二人の運命を決めていく。

「私」の母親は、父親の死後終日他人の衣類を洗濯し、手はがさがさに荒れ、汚れた靴下の臭いで食事がのどを通らなくなるほどまで働くが、母娘の生活に足る収入は得られない。生きるために再婚を決めた母は目に涙を浮かべて娘にこう言った。「おまえを餓死させるわけにはいかないのよ<sup>17)</sup>。」<sup>p258</sup>民国期には寡婦に対して守節を求める明清以来の風潮がまだ続いており<sup>18)</sup>、再婚は忌避されたことから、母の涙は父への思慕だけではなく、社会から蔑まれることへの悲哀をも含んだものであろう。だが餓死を避けるには再婚するしかない。数年後この再婚相手が失踪して母娘を捨てると、母は私娼となり生計を立てるが、娼婦を続けることが困難な年齢になると再び男性の経済力を頼り、娘を置いて饅頭店主の情婦となる。しかし数年後にはこの情夫にも捨てられてしまう。この母親を通じて描かれるのは、経済的に自立できず男性に従属することでしか生きられない、家父長制<sup>19)</sup>によって抑圧された女性の姿である。親や夫に仕えることだけを求められてきた女性に経済的自立は難しく、男性の身勝手に翻弄される男性優位社会の不平等に耐えて生きるほかないのである。この不条理な運命は娘の「私」の人生においても繰り返される。自立しようにも仕事が見つからず、校長の甥の愛人となることで食と住を得た「私」は、「母さんと同じになってしまった」<sup>p267</sup>と嘆くのであった。さらにこの男性の元を去ってから漸く見つけた食堂の仕事を、男性客に媚びる接待はできないと辞めてしまうが、心の中には「女の人がお金を稼ぐにはこんな風にするしかない、ほかに道はない。」<sup>p270</sup>という諦念がある。最終的に「空腹は最大の真理」<sup>p273</sup>と食べるために娼婦になった私は、母との再会でこう思う。「母さんが私を養ってくれた

ときは、母さんがこうしなきゃならなかった。こんどは私が母さんを養う番だから、私がこうしなきゃならない。女の職業は代々同じ、これしかないのよ。」<sup>p276</sup>このように、経済的自立がかなわず、貧困の中で生きるために男性に従属するか自分の性を商品化するかわからない不条理な運命を、「私」は諦め受け入れていくほかなかったのである。

では、運命を受け入れていく過程で、自分の境遇に向き合った「私」の心の葛藤をみてみたい。何不自由なく暮らす同級生の少女たちと、食べるにも事欠くうえに娼婦を母に持つ自分との境遇の違いを言う場面を幾つか抜粋する。「私」は懸命に仕事を探しても見つからず、母は娼婦になるほかなかったのだ、とかつて憎んだ母を許す気持ちになった後で、学校で教わったことや道徳は全て食足りて後のお遊びだと笑い飛ばして次のように言う。

同級生たちは私にあんな母さんがいることを許さない。彼女たちは私娼を冷笑しているのだもの。そうよ、彼女たちはそう思っているのよ、食べるのに困らないのだもの。<sup>p266</sup>

また食堂の接客係を辞めて仕事を探していたとき、かつての同級生に出会うと彼女たちが夢見がちなおばかさんに思える。

彼女たちはまだ夢を見ているようだった。綺麗にお洒落して、まるで店先に並ぶ品物のようだった。彼女たちの目は若い男の人を追い、まるで心の中で愛の詩を作っているかのよう。ばかみたい。そうね、彼女たちを許してあげるべきだわ。彼女たちは食べるのに困らないのだもの。お腹がいっぱいになったら恋するしかない。<sup>p272</sup>

生きるための食という生存の最低限の条件さえ満たされない貧困の中において、「私」は同級生たちを嘲笑することで悲しみや苦しさを封じているのである。さらに彼女が飢えているのは食だけではなく、愛情においても同様である。かつて自分を愛してくれた母は「私」に娼婦になるか自立するかを選択を迫り、「私」が自立を選ぶと去って行った。「私」は愛し愛される人が誰もいなくなったことを嘆く。「私の世界には私だけが残った。」<sup>p263</sup>、「母さんとはもう二度と会えない。愛は私の心のなかで死んでしまった。」<sup>p263</sup>そして同級生とわが身の

境遇の違いに孤独をかみしめるのであった。

私は同級生たちとは違う。彼女たちは朝から晩まで他の人に注目している。人が何を食べたか、何を着ていたか、何を言ったかと。でも私はいつも自分に注目している……私の心にはいつも私がいる。だって誰も私を愛してくれないから。私は自分を愛し、自分を憐れみ、自分を励まし、自分を責めた。<sup>p263</sup>

このように物質的にも精神的にも満たされない「私」は恵まれた同級生たちを羨望するが、そこで嘆くのではなく、突きつけられた不平等な現実を受け入れて生きようとしたのであった。その後娼婦になった「私」は日々の飢えからは解放されるが、その代償として病と精神的苦痛を抱えて懊悩し、それでも生きるためには娼婦を続けねばならない。そして警察に摘発された後も、同じ娼婦であっても納税している公娼はお咎めなしだとその理不尽を恨むのであった。

小説は不平等で理不尽な世の中で「私」が救われることのないまま終わっている。この点では他の妓女小説と変わらないようにも思えるのだが、「私」の表象には老舎の他作品の妓女たちとは明らかに異なるものがある。比較のために他作品として「微神」と「駱駝祥子」をとりあげる。「微神」<sup>20)</sup>では主人公「私」の初恋の人である「彼女」は、娼婦になった「彼女」を救おうとする「私」に取り合わず墮胎の際に自死する。また「駱駝祥子」<sup>21)</sup>の小福子は、いつか迎えに行くと言った祥子を待ち侘び、娼館での日々で耐え切れずに自らの命を絶つ。この二人の女性と「月牙兒」の「私」を比較したとき、「彼女」と小福子が絶望や諦念のなかで自ら死を選ぶのに対して、「私」は絶望の中であってなお生きる望みを捨てきれない。そこにある自分の命への愛と慈しみは、「彼女」や小福子には描かれなかったものである。ではなぜ老舎は「私」を死なせず、彼女に生への意志を語らせたのであろうか。次節では「私」が語った言葉を追いつつ、老舎の意図を考えたい。

### 3.2 神の前の平等

「私」が普通の少女から娼婦へ、そして被逮捕者へと変わる過程で、自分の



命や生きることに對して語った言葉に注目する。

校長の交代が決まると、新しい校長に追い出される前にと仕事を探しに行くが見つからない。途方に暮れて母と同じ道を行くしかないと諦めそうになるが、踏み止まり自分を励ました。

私はかろうじて死ななかった、考えはしたけれど。いいえ、私は生きていたい。私は若いし、綺麗なのよ。私は生きていたい。恥は私のせいじゃない。p266

娼婦になるくらいならと死が頭をよぎったが、「生きていたい」という強い思いが死を打ち消した。自分のせいではないと開き直すことで小さな希望が見え、この後恥を忍んで校長に再び援助を請いに向かう。しかし結局希望は失望へと変わり、娼婦になり、さらに病気で苦しむようになると、「もう生きて行く必要はない」p274と考えるようになる。だが自ら命を絶つことはしない。母と再会してからも二人が生きるためには他の道はなく、「私」は肉体的にも精神的にも崩壊へと向かい死の影を予感するが、それでもなんとか生きようとする。

私のこんな命は少しも惜しくないけれど、それでもやはり命なのだから、手放したくはない。それに私がしたことは決して私自身の過ちじゃない。もし死が怖いなら、それは生きていることが愛おいしいからよ。私は決して死の苦しみが怖いんじゃない。もう随分前から死ぬよりずっと苦しいもの。私は生きるのが好き。でもこんな風に生きたいんじゃない。p278

絶望的な日々の中で、こんな命は惜しくないとも思うが、与えられた命を慈しむ気持ちは捨てられない。理想の生活を思い描いてみるが、かえって自分を苦しめることになる。彼女が思い描くのは決して華やかな暮らしではなく、貧しくても普通に働き生きていく、人としての尊厳が保たれる生活であろう。だがそれさえ彼女にとっては叶わぬ夢でしかない。いっそ死んだ方が楽かもしれない、でも生きたい、けれど「こんな風に生きたいんじゃない」という堂々巡りの出口は見つからない。監獄に収監されるとそこは人の一切の希望を奪い去るようなところであったが、「私」はもうそこから出たくないと思う。

私は死にたくない。もしここから出られて、どこか少しましなところがあるのなら。事實はそうでないのだから、どこで死のうとおなじこと。<sup>p279</sup>  
「私」はすでに諦観して死を覚悟しているようだが、「もし」という仮定に生への最後の意志が見える。本当は生きて自分の願うような人生を送りたいという思いは完全には潰えていないのである。

小説の中で明らかにされてはいないが、「私」は満州族の娘であろうと思われる。その理由の一つは母親が纏足をしていないと推察できることである。墓参の場面で郊外の墓地までの長い道のりを往復し、疲れた幼い「私」を抱いて歩いたりするのは纏足女性にはできないことである。1900年代初頭に生まれ北京城内に住んでいた纏足をしていない女性という、満州族である可能性が高い<sup>22)</sup>。もう一つは「私」が自活しようと職を探しても全く見つからないことである。確かに当時女性の就職は困難ではあったろうが、貧困層の女性で働く者は少なくなかった。例えば都市にはすでに工場で工員として働く貧困層の女性がおり、その数は日清戦争以前に全国で約3万5000人、1919年には約23万人になり、労働者全体の35%を占めたという<sup>23)</sup>。また感化院は洗濯、縫製、調理、編物、織物などの手仕事を教え、ちゃんと働けば自活できると言うのだが、「私」はこれらは全部できるがそれでも仕事がなかったのだと言っている。満州族が雇用においても差別を受けていたことを想起させられる。さらにこの小説には老舎自身の経験が反映されている。父親の死と貧困は老舎自身の生い立ちを彷彿させるが、実の所母娘が郊外の父親の墓を訪れるエピソードは老舎の体験に基づいたものだという。母親が土饅頭を抱いて泣いたこと、「私」が買ってもらった焼き栗で手を温めたこと、帰り道に三日月を見上げたことなどである。母親が読み書きのできないことや、洗濯で手を荒らし靴下の臭いで食事が喉を通らなくなることも、老舎の母に重なるという<sup>24)</sup>。老舎の母は気丈に家族を支えたが、一步間違えば「月牙兒」の母娘と同じ運命を辿っても不思議はなかったのである。このように小説には老舎自身やその周囲の人々、彼の育った環境が投影されており、「私」は抑圧された満州族全体を象徴しているようにさえ思えるのである。

では老舎が「私」を他の娼婦のように死なせず、彼女に生への意志を語らせた意図を考えたい。老舎は「私」に自分の運命に対峙する意志を持たせた。これは「微神」の「彼女」や「駱駝祥子」の小福子が家族を養う役割を担わされて必然的に娼婦になり、自分の運命に抗う意志を持ち得なかったのとは大きく異なる。「私」はまず自立するか母を手伝うかという選択肢を与えられ、次に不遇な運命と戦う意志を持っていた。結局抗いきれずに娼婦となったが、その後も生への意志を持ち得たために、自死せず生き抜くことができたのである。そして老舎は「私」を死なせず生への意志を語らせることで、単に同情や憐憫の対象ではない、一人の人としての「私」の命にスポットをあてたのである。「私は生きていたい」という真っ直ぐな思いが「もう生きて行く必要はない」と変わった後でさえ、「私」は生を諦めきれなかった。「それでもやはり命なのだもの、手放したくはない。」という命への慈しみと、「私は生きるのが好き。でもこんな風に生きたいんじゃない。」という尊厳ある生への渴望、これらが示唆するのは人の命の重さであろう。老舎は絶望にあつてなお生きようとする「私」の姿を通じ、たとえ現実の社会は不平等であっても、「私」という一人の人間は他の全ての人と等しく価値ある尊い存在であるという、人間の本質的平等を描いたのではないだろうか。

現実の世界は不平等なものである。人が生まれながらに与えられているものや境遇などは皆それぞれに異なり決して平等ではない。森本によれば、不平等な現実にあつて、それにもかかわらず人間の本質における平等という観念を語るには、何らかの宗教的な信念の裏打ちが必要なのだという。「経験の世界を越えたところにある超越的な根拠」に基づいてはじめて、「すべての人間が、いかなる境遇にあらうとも、尊厳においてかけがえのない存在であり、権利において絶対に平等である」と言えるのだという<sup>25)</sup>。老舎がキリスト教の愛と平等の教えを受け入れ、それが彼の価値観を形成する大きな要素となったことは2-2で述べたが、このように彼はキリスト教という「超越的な根拠」を有していたのである。キリスト教では、すべての人は神に愛される尊い存在であり、神の前に人はみな平等なのだとされる。老舎はこの根拠に基づいた、人は本質

的に平等であるという信念を有しており、それを「私」の尊厳ある生への希求を通して描いたのであろう。不平等な社会の中で自分の境遇を受け入れ与えられた命を生き抜こうとする「私」は、たとえ人々に侮蔑される娼婦であっても、神に等しく愛される尊い存在なのである。さらに老舎が「私」の姿に託した平等という信念は、「私」に象徴される社会の下層に生きるすべての人々へのメッセージでもあると言えよう。

#### 4. おわりに

幼少期より貧困と差別の中で育った老舎がキリスト教に出会い、その愛と平等の思想に心癒され共感し、それは彼の人格の基礎にしっかりと組み込まれた。自らの生い立ちから、平等への強い願いを有する老舎は、このキリスト教の教えに基づき、人はすべて神の前に平等であるべきだという信念を持っていた。そして老舎は自身の生い立ちとも重なる「月牙兒」で、この信念を、主人公に生への意志を語らせることを通じて描いたのであった。社会の底辺で苦しみながらも生き抜き、人として尊厳ある人生を生きたいと願う「私」の姿に、人は神の前にみな平等であり尊い存在であるという、現実社会の不平等を越えた人間の本質的平等というメッセージを託したのであった。

老舎の作品には、娼婦の他にも車夫、職人、警官等の職業に就く、満州族と思いき人がしばしば登場する。老舎はイエス・キリストがそうしたように自らも社会の低層で苦しむ人々の側に立ち、不平等な現実社会に生きる彼らを描き続けたのであろう。「月牙兒」にみる神の愛に根差した平等は、満州族でありクリスチャンである老舎の根源的願望であったと考えられよう。

これまで老舎のキリスト教受容に関しては、彼の教会での活動内容の追跡、作品中に登場するキリスト教関連の要素や教義を体現する登場人物の指摘など、様々な角度から老舎文学へのキリスト教の影響が研究されてきた。しかしキリスト教の思想あるいは精神性という視点から作品を読むという試みはほとんどなされていないようである。本稿では、抗日戦争の後方支援に参加してナショナリズム色の濃い作品を量産する前の、山東時代に書かれた「月牙兒」を

取り上げ、キリスト教の愛と平等という視点から読み直すことを試みた。老舍文学におけるクリスチャンやその他キリスト教的要素の表象には、好意だけでなく敵意や嫌悪の描出もある。その背景には西洋列強の中国進出と一体化していたキリスト教に対する老舍の愛国者としての心情や、社会情勢の変化にともなう彼自身の思想の変化などもあり、作者の真意を汲むのは容易ではない。しかし老舍が若き日に傾倒したキリスト教思想とその後どう向き合い、それをどう描いたかを探ることは、老舍文学の無視できぬ一つのピースを探す、必要な試みなのだと考えている。

## 注

- 1) 老舍は1930年7月からの約7年を山東で過ごした。この間、済魯大学（済南）及び山東大学（青島）で教鞭をとる傍ら小説や散文を発表し、講演も行った。1937年11月に家族を済南に残し単身武漢へと向かい、抗日戦線の後方支援に加わった。
- 2) 張敏・周小麗「『本来的象徴』與『情調象徴』—老舍小説象徴芸術之探尋」『滁州学院学報』第19卷（2017年4期）。
- 3) 奮飛「母女兩代的血泪控訴—老舍「月牙兒」賞析」『名作欣賞』（1981年5期）。
- 4) 閻順玲「女人是月亮—解讀「月牙兒」」『哈爾濱師範大学社会科学学報』（2017年4期）。
- 5) 龔婕妤「一曲生命的悲歌—「月牙兒」主題解讀及其創作探由」『文史雜誌』（2015年1期）。
- 6) 李蓉「苦難與愉悅的双重叙事話語」『文学評論』（2006年2期） p141-142。
- 7) 郭文元「「月牙兒」與底層妓女的現代書写」『当代文壇』（2010年4期） p83。
- 8) 江上幸子「近代中国における主体的妓女の表象とその夭折：民国期の多様なメディアから」『中国のメディア・表象と現代文学』研文出版（2016年） p148-150。
- 9) 舒乙『老舍先生』中国青年出版社（2015年） p47-48参照。
- 10) 関紀新「老舍民族真理芻説」『滿族研究』（2006年3期） p94-96参照。

- 11) 満州族の就職と漢民族による差別については次の論文を参照した。  
趙書「辛亥革命前後の北京満族人」『満族研究』(1989年3期)。  
杜佩紅「民国時期北京旗人的「社会形象」及其身份認同」『内蒙古大学学报(哲学社会科学版)』第49卷(2017年3期)。
- 12) 老舎「下郷簡記」、曾広燦・呉懐斌編『老舎研究資料(上)』知識産権出版社(2010年)p197、(初出『北京日報』(1978年2月21日)、未見)。
- 13) 老舎は五四運動で反封建、孔子否定の思想を知り影響を受けたことを次の文章に記している。「“五四”給了我什麼」12)p92、(初出『解放軍報』(1957年5月4日)、未見)。
- 14) 白水紀子『中国女性の20世紀—近代家父長制研究』明石書店(2001年)p49。
- 15) 『聖書』ヨハネによる福音書15:11-17参照。
- 16) 原文「己所不欲、勿施於人」(顔淵第十二)、日本語訳と原文は金谷治『論語』岩波書店(2015年)p226による。
- 17) 本稿で使用したテキストは、『老舎全集』7、中国人民出版社(2013年)により、引用文の頁番号は本文中に示す。日本語訳は以下すべて筆者による。
- 18) 14)p131参照。
- 19) 白水氏は、「家父長制とは70年代以降のフェミニズムの理論構築の中から生まれた新しい概念で、それは「性と世代に基づいて、権力が不均衡に、そして役割が固定的に配分されるような規範と関係の総体」をいい、男性の支配に対する女性の従属(性による支配)と上位の世代による子の支配(世代による支配)を本質とする社会システムをいう。」としている。14)p8-9。
- 20) 「微神」(初出『文学』第1巻第4号(1933年)、未見)は、作者自身の初恋の投影と言われる短編小説。「私」と「彼女」は相思相愛だが、彼女の親に言い出せぬまま私は南洋へ旅立つ。数年後に戻ると彼女は父親の破産により娼婦になっていた。それでも私の思いは変わらないが、会いに行っても彼女はまるで取り合わず、結婚の申し込みも一笑に付す。その後会えぬまま彼女は亡くなるが、私の幻想の中に彼女が現れ、私の心の中に住むために自死したのだと告げる。

- 21) 「駱駝祥子」(初出『宇宙風』第25-48期(1936-37年)、未見)は、北京の社会低層に生きる車夫の半生を描いた長編小説。小福子は車夫祥子の近所に住む心優しい娘で、飲んだくれの父と弟たちを養うため娼婦になる。祥子が妻を亡くした後、二人は互いの気持ちを確認し、祥子はいずれ迎えに来ると小福子に告げるが、その後は日々の生活に流されてゆく。漸く暮らしの目途が付き小福子を迎えに行くと、彼女は娼館ですでに自死していた。
- 22) 漢民族の纏足の風習は清朝皇帝による禁止令、清末の反対運動を経ても容易に廃れなかった。纏足廃絶の時期は南方と北方、都市と農村、また社会の階層によっても異なり一概には言えない。西太后が1902年に纏足禁止令を出した後、1920年代半ばになると華南ではかなり少なくなったが華北では依然多かった(桑原隲蔵『東洋文明史論』平凡社東洋文庫(1988年) p188-189参照)こと、また1920年代になっても国民党政府が各地で繰り返し纏足禁止令を出しており、幼女への纏足強要の根絶は1950年代であった(関西中国女性誌研究会編『中国女性史入門』人文書院(2005年) p67参照)ことなどから、1900年頃に生まれた北京庶民の漢民族女性には纏足のものが多かったであろうと考えられる。
- 23) 関西中国女性誌研究会編『中国女性史入門』人文書院(2005年) p92参照。
- 24) 9) p42、p49-50参照。
- 25) 森本あんり「信仰なくして平等なし」『信徒の友』(2006年4月) p71参照。